

きょうだいと子どもの社会的発達に関する研究

山口順子*・田中理絵

The Study of Siblings and Social Development in Early Childhood

Junko YAMAGUCHI & Rie TANAKA

(Received September 26, 2008)

1. 研究の目的と課題

人間の社会的発達において、人間が最初に所属する集団である家族における社会化は、最も基礎的・基底的なものである。基礎的というのは、乳幼児期における社会化内容が人間の生涯にわたる基礎的な生活習慣としての思考・行動様式であるということ、また基底的というのは、乳幼児期の社会化内容が、その後の社会化を方向づけ、社会化の内容を選択していく枠組みになるような思考様式であるということである（住田、2002）。決定的な社会化作用をうける家族集団における社会化は、子どもの人格形成上、重要な意味をもっている。

子どもの成長過程における基本的な人間関係は、①家庭内の親子関係、②家庭内のきょうだい関係、③家庭外の友達関係の3つであり、それぞれが「タテの関係」、「ナナメの関係」、「ヨコの関係」とよばれている（依田、1980）。きょうだい関係は、「タテの関係」と「ヨコの関係」という2つの異なった要素が合成されているため、「ナナメの関係」という。タテの関係である親子関係からヨコの関係である友達関係への橋わたしという重要な役割を担っているのが、家庭内でのきょうだい関係である。きょうだい関係を経験しているかないかで、友達の作りやすさに影響がでてくるとも言われており、依田（1980）は「きょうだい関係は、親子関係と友達関係をつなぐものとして重要な意味をもつ」と述べている。また、詫摩（1981）は、人間関係における社会的規範を適切に内在化できるかという重大な問題は、きょうだいの有無に非常に影響されることを指摘している。それは、きょうだい関係が「ヨコの人間関係」を築いていく上での基礎となり、子どもが家庭外に出る前に家庭内で社会性を身につける、つまり社会化される機会となるからである。したがって、子どもが社会性を身につける上で、きょうだいは重要な存在であるといえる。

「きょうだいは多いほうが良い」や「ひとりっ子はわがままである」、「さすが〇〇ちゃんは長男（長女）だからしっかりしているわね」といった言葉を聞いたり、発した経験はないだろうか。このような会話に代表されるように、「きょうだい」に関する一種の言説のようなものが存在していることは明らかである。このような言説は、「きょうだい」が子どもの社会的な発達に何らかの影響を及ぼしているのだという世間一般的な考えを反映している。それにも関わらず、日本においては、母子関係を含め親子関係に関する研究に比べると、きょうだい関係に関する研究は少ない。きょうだいの存在が子どもの社会的な発達にどのような影響を及ぼすのかということ調査し、明らかにした研究はほとんど見受けられず、先にあげた言説に関し

* 大分大学大学院教育学研究科

でも根拠を見出すことは困難である。

そこで本研究では、そのような言説に関して根拠を見出すことができるのかどうか、つまり、きょうだいの存在によって、子どもの社会的な発達に影響があるのかどうかについて明らかにしていくこととする。

ここで、「子どもの社会的発達」という言葉の意味について確認しておきたい。子どもの社会的発達とは、子どもの社会性の形成（つまり社会化）と同義である。そして社会性の形成（＝社会化）とは、社会的スキルの獲得を意味する。社会的スキルとは、「人間が自分の所属する社会の中で様々な葛藤を経験しながら身につける技術、技能であり、人間関係を築いていく上で重要な手段となりうるスキル」のことである。

本研究の目的は、きょうだいを与える子どもの社会的発達への影響の有無や程度を解明することである。そのため、幼稚園児の社会的スキルに注目することとした。きょうだいの存在が子どもの社会的スキルの発達に影響を及ぼすのかどうか、及ぼすのであればどのような影響があるのかを明らかにするために、「きょうだいは子どもの社会的な発達を促進させる」ことを仮説として分析をすすめる。この仮説が正しいと証明されれば、少子化への警鐘として、きょうだいの存在の重要性について再考するきっかけを社会に広く示すことにもなるであろう。

2. 先行研究と本研究における仮説

きょうだいと子どもの発達に関しては、アメリカにおいて多くの研究の蓄積がある。それらの先行研究の中には、きょうだいがいるかいないか、つまりひとりっ子かそうでないかということに焦点を当てているものが多い。研究結果では、きょうだいの重要性を指摘しているものもあれば、きょうだいの有無によって子どもの発達に明らかな差は見られないことを指摘しているものもあり、議論は続いている。

DowneyとCondrón(2004)は、“The Early Childhood Longitudinal Study-Kindergarten Class of 1998-99”(以下ECLS-Kと記述する)という大規模な調査のデータを用いて、きょうだいがいることによる1つの可能性として「きょうだいは子どもの社会的なスキルや対人関係におけるスキルを促進させる」ということをあげた¹⁾。彼らは「きょうだい」と「社会的スキル」に関して、きょうだいの資源分配説(siblings as a resource dilution)²⁾と、きょうだいの資源供給説(siblings as resources)³⁾をあげている。前者は、「きょうだいがいることによる利点はほとんどない」とする研究者の立場からの説であり、後者は「きょうだいがいることによる利点はある」とする研究者の立場からの説である。アメリカではきょうだいの資源分配説を支持する先行研究の方が多かった。

そこでDowneyとCondrónは、それまでの先行研究で主に支持されていた資源分配説、つまり、「きょうだいが増えれば増えるほど、両親から与えられる時間やエネルギー、お金など教育的なものを含めた資源(parental resources)が分配されるので、きょうだいの存在によって子どもが利益を得ることはほとんどない」という説に対抗しようと試みたのである。アメリカにおける先行研究では、「きょうだい人数」と「教育的な結果」の関係のみに焦点を当てており、「きょうだい人数」と「社会的なスキルや対人関係におけるスキル」の関係に焦点が当てられていなかったことを彼らは指摘した。そして、それまで無視されてきたとされるきょうだいがいることによる何らかの利益を実証しようとしたのである。

彼らは主な研究課題として、(1)きょうだいが少ない子どもよりもきょうだいの多い子どもの方がより良い社会的スキルと対人関係におけるスキルを示すのか、(2)きょうだいの数の多さと

社会的スキルとの間の関係は、統制を加えても維持されるのか、(3)社会的スキルの発達のために、何か特定のきょうだいの種類はあるのか、の3つをあげた。

これら3点の課題に対して、ECLS-Kのデータを参考に彼らは分析及び考察を進め、「少なくとも1人のきょうだいと共に育っているときに、仲間関係がより上手いく」という見解を導き出した。3つ目の研究課題については明らかにはならなかったが、1つ目と2つ目の研究課題は支持される分析結果となり、彼らは「きょうだいのいる子どもは平均的にきょうだいのいない子どもに比べてより良い社会的スキルと対人関係におけるスキルを示す」と結論付けている。

以上を踏まえ、本稿では次の2つの仮説を設定した。すなわち、仮説1:「きょうだいがいる子どもの方が、きょうだいがいないひとりっ子よりも社会的スキルの発達がみられる」、仮説2:「きょうだいの規模が大きいほど家庭内での子どもの相互作用が頻繁なため、きょうだい規模が小さい子どもに比べて、社会的スキルを身につけることができている」である。

3. 方 法

(1) 調査の方法と対象

本研究では、ECLS-Kを参考に、幼稚園児の保護者を対象とした郵送法による自記式質問紙調査（「幼稚園児の生活に関するアンケート」）を実施した（2007年6月20日～7月4日）。全国の公立幼稚園をランダムサンプリングし、合計10園の調査協力を得た。調査対象は幼稚園児の保護者1,072人で、有効回答数は869票（回収率81%）であった（表1-1、表1-2を参照）。園児の性別は、男子が51.6%（448人）、女子が48.3%（420人）、不明が1%（1人）、平均年

表1-1 調査の概要（調査期間：2007年6月20日～2007年6月29日）

幼稚園名 (都道府県名)	A幼稚園 (青森)	B幼稚園 (岩手)	C幼稚園 (静岡)	D幼稚園 (徳島)	E幼稚園 (愛媛)	F幼稚園 (山口)	
有効回答数	71	67	87	42	83	121	
回 収 率	86.1%	89.3%	86.1%	84.0%	91.2%	82.9%	
回答者 属 性	父	1.4%	0.0%	3.4%	2.4%	1.2%	3.3%
	母	97.2%	97.0%	96.6%	97.6%	96.4%	96.7%
	祖母	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%
	不明	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%

表1-2 調査の概要（2007年6月25日～2007年7月4日）

幼稚園名 (都道府県名)	G幼稚園 (北海道)	H幼稚園 (兵庫)	I幼稚園 (岡山)	J幼稚園 (大分)	
有効回答数	87	130	95	84	
回 収 率	75.7%	86.7%	68.3%	87.5%	
回答者 属 性	父	0.0%	1.5%	0.0%	2.4%
	母	98.9%	97.7%	95.8%	96.4%
	祖母	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%
	不明	1.1%	0.8%	3.2%	1.2%

年齢は4歳11ヶ月（59ヶ月）であった。

ところで、本研究の対象として幼稚園児を設定した理由は3点ある。第1に、幼児期の子どもの社会化は、最も基礎的、基底的であり、その後の社会化を決定付ける意味でも重要であるからである。第2に、きょうだい以外の他者との相互作用の多さを考えた場合に、幼児期はきょうだいからの影響を測るには適切な時期であると考えられるからである。人間は家族集団以外の第一次集団からも社会化を受け、成長するにしたがって多くの第一次集団からの影響を同時に受けるようになることが考えられる。家族という第一集団に属するきょうだいからの影響を明らかにするためには、他者との関わりが限定されていると考えられる幼稚園児の社会的なスキルを測ることが必要である。第3に、子どもが家庭内で身につけた社会的スキルを実際に家庭外で発揮する初めての場所が幼稚園であると考えた。以上、3点の理由から、本研究では幼稚園児を対象とした。

(2) 分析方法

本研究では、子どもの社会的な発達におけるきょうだいの影響の有無を明らかにすることが目的であるので、独立変数として「きょうだい人数」を設定する。調査対象者のきょうだい人数は、「ひとりっ子」が16.5%、「2人きょうだい」は58.2%、「3人きょうだい」は22.9%、「4人きょうだい」は2.0%、「5人きょうだい」は0.2%、「6人きょうだい」は0.2%であった。4～6人きょうだいの割合が非常に少なかったため、分析する際には、以下の3タイプに分類し直した。

「きょうだい数モデル a」…「ひとりっ子」と「2～6人きょうだい」に分けて、きょうだいの有無に着目。

「きょうだい数モデル b」…「ひとりっ子」と「2人きょうだい」、「3～6人きょうだい」の3群に分類。

「きょうだい数モデル c」…「ひとりっ子」と「2人きょうだい」、「3人きょうだい」、「4～6人きょうだい」の4群に分類。

「きょうだい数モデル a」（以下、aモデル）はきょうだいの有無に注目し、「きょうだい数モデル b」「きょうだい数モデル c」（以下、bモデル、cモデル）はきょうだいの規模に着目している。

従属変数は社会的スキルを表す12項目（「対人関係能力」4項目、「自己統制能力」3項目、「問題行動の抑制能力」5項目）である。これらは、ECLS-Kで用いられていた Interpersonal skills（対人関係能力）、Self-control（自己統制能力）、Externalizing problem behaviors（問題行動の表出）という3つの大別した社会的スキルを参考にして作成した。12項目それぞれが表している社会的スキルは、ECLS-Kより、①友人関係を作ること、またそれを維持すること、②友達を安心させたり、助けたりすること、③感情や、考え、意見などを前向きな方法で表現すること、④友達の感情に関して気を配ること、⑤友達の権利を尊重した行動をとる、⑥気性をコントロールする、⑦友達からのプレッシャーに対して適切に対処する、⑧論争しない、⑨乱暴しない、⑩怒らない、⑪衝動的な行動をとらない、⑫全体の活動を妨げない、である。①～④が Interpersonal skills（対人関係能力）、⑤～⑦が Self-control（自己統制能力）、⑧～⑫が Controlling problem behaviors（問題行動の抑制能力）となる。

ただし本調査は、幼稚園児の保護者に対する質問紙調査であり、否定的な項目については幼稚園側の協力が得られにくいという性質上、「問題行動」に関してはECLS-Kのように「問題行動の表出」を示すのではなく、「問題行動の抑制能力」を表す質問項目に変更した。その結果、ECLS-Kに合わせて、社会的スキルの指標として以下の12の質問項目を設定した。すなわち、①初めて会った同年代の子どもに自分から話しかけることができる、②けんかをしているお友達の間に入って、けんかをとめようとすることがある、③お友達と一緒に遊ぶときに自分が何をしたいのかを伝えることができる、④困っているお友達に自分から声をかけることがある、⑤友達と一緒に遊ぶときに、お友達に何をしたいのかを尋ねることができる、⑥自分が遊んでいるおもちゃをお友達にとられてもあまり怒らない、⑦ブランコに乗っているときに、「私も乗りたい」という子がやって来たらブランコを譲ってあげることができる、⑧あまり口げんかはしないほうである、⑨どんなに腹が立っても乱暴はしない、⑩めったに怒らない、⑪嫌なことがあっても叫ばない、⑫わがままを言わずにみんなと一緒に遊ぶことができる、である。

これらの項目に対し、「1 よくあてはまる」、「2 少しあてはまる」、「3 あまりあてはまらない」、「4 あてはまらない」の4つから回答者（保護者）に評価してもらった。分析の際には、それぞれの得点を逆にすることによって「得点が高いほうが社会的スキルを身につけている」と評価できるようにした。

本稿では、まず、3つに大別した社会的スキル（対人関係能力、自己統制能力、問題行動抑制能力）ときょうだい関係について分析を行い、次により詳細に12項目の社会的スキルとの関係について明らかにしていこうと思う。クロス分析の結果から、有意差がみられた具体的な12項目の社会的スキルに関しては、それらに対する保護者の評価を得点の高さから分析し、独立変数との関係を明らかにする。また、「問題行動の抑制能力」の項目で得た得点を逆にして、「問題行動の表出」を示すことによって、ECLS-Kがあげていた「問題行動の表出」と独立変数との関係も明らかにする。

また、本研究では家庭内でのきょうだいの関わりが社会的な発達に影響を及ぼすことを仮定するので、きょうだいの定義については、広辞苑による定義に、新たに「生活をともにする」という条件を付け加え、「同じ親（または片親）から生まれた者、また結婚などの結果、同じ人を親とする関係になり、生活を共にする者」と定義することにする。

4. 分析結果

まず、「園児の年齢」と「きょうだい人数」とをクロス分析した結果、有意差がみられなかったことから ($p = .776$)、独立変数である「きょうだい人数」は「園児の年齢」から影響を受けていないことを確認した。

次に、「きょうだい人数」が与える「社会的スキル」への影響を調べるため、「きょうだいの有無」（モデルa）と「きょうだいの規模」（モデルb、c）に注目した。「モデルa、b、c」と「対人関係能力」（質問項目①～④）、「自己統制能力」（⑤～⑦）、「問題行動の抑制能力」（「問題行動の表出」）（⑧～⑫）のそれぞれの合計得点を出し、その平均値からの高低に分けて（2分法）、クロス分析を行った。その結果、有意差が認められたのは、「モデルa」（きょうだいの有無）では「問題行動の表出」のみであり ($p = .065$)、「モデルb、c」では「自己統制能力」（それぞれ $p = .017$, $p = .024$ ）との間に関係が見られ、「対人関係能力」については、今回の調査ではきょうだいの有無やきょうだい規模との関連が見られなかった。

各モデルと社会的スキルとのクロス分析結果は表2～表4のとおりである。

表2 きょうだいの有無(モデルa)×問題行動の表出(%)

	問題行動の表出		合 計
	高 い	低 い	
きょうだい無し	42.6	57.4	100.0 (141)
きょうだい有り	51.3	48.7	100.0 (714)
合 計	49.8	50.2	100.0 (855)

$$\chi^2=3.571, df=1, p=.065$$

表2より、「問題行動の表出」に関しては、きょうだいがいない子どもよりも、きょうだいがいる子どもの方が平均よりも高得点の者の割合が多く、「ひとりっ子」の方が、きょうだいのいる子どもよりも問題行動の抑制能力が高いことがうかがえる。よって、仮説1「きょうだいがいる子どもの方が、きょうだいがいない子どもよりも社会的スキルの発達がみられる」については、「問題行動の表出」については却下された。

表3 きょうだいの規模(モデルb)×自己統制能力(%)

	問題行動の表出		合 計
	高 い	低 い	
ひとりっ子	39.4	60.6	100.0 (142)
2人きょうだい	38.2	61.8	100.0 (495)
3～6人きょうだい	49.5	50.5	100.0 (214)
合 計	41.2	58.8	100.0 (851)

$$\chi^2=8.174, df=2, p=.017$$

表4 きょうだいの規模(モデルc)×自己統制能力(%)

	問題行動の表出		合 計
	高 い	低 い	
ひとりっ子	39.4	60.6	100.0 (142)
2人きょうだい	38.2	61.8	100.0 (495)
3人きょうだい	50.8	49.2	100.0 (193)
4～6人きょうだい	38.1	61.9	100.0 (21)
合 計	41.2	58.8	100.0 (851)

$$\chi^2=9.431, df=3, p=.024$$

次に「きょうだいの規模」と「自己統制能力」の関係について見ると（表3）、自己統制能力が高いのは、きょうだい数が3人以上の場合であることが分かる。また表4より、4人以上のきょうだい数になると、ひとりっ子や2人きょうだいと自己統制能力は変わらず、特に3人きょうだいの場合が最も自己統制能力が高いことが分かった。したがって、仮説2のように、「きょうだい規模が大きければ大きいほど社会的スキルの発達が促進される」というわけではないようである。

さて、ここからは、「きょうだい人数」と社会的スキル12項目との関係についてより詳細に見ていこう。表5は、「きょうだいモデルa・b・c」と「社会的スキル①～⑫」のクロス分析の結果における有意確率だけ抜き出したものである。

表5 「きょうだいモデルa、b、c」×「社会的スキル①～⑫」（数値は有意確率）

	対人関係能力				自己統制能力			問題行動の抑制能力				
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
モデルa	.041	.345	.851	.577	.195	.081	.189	.012	.020	.188	.924	.036
モデルb	.125	.100	.973	.016	.065	.122	.326	.031	.028	.325	.929	.095
モデルc	.141	.264	.989	.010	.092	.154	.619	.052	.107	.455	.959	.205

社会的スキル①と⑥は、「きょうだいモデルa」のみで有意差がみられることに注目したい。「①初めて会った同年代の子どもに自分から話しかけることができる（対人関係能力）」、「⑥自分が遊んでいるおもちゃをお友達にとられてもあまり怒らない（自己統制能力）」に関しては、きょうだいの規模ではなく、きょうだいの有無が社会的スキルの発達に影響していることが考えられる。

同様に、社会的スキル④と⑤では、モデルaでは有意差がみられず、モデルbとモデルcで有意差がみられることから、「④困っているお友達に自分から声をかけることがある（対人関係能力）」と、「⑤友達と一緒に遊ぶときに、お友達に何をしたいのかを尋ねることができる（自己統制能力）」という社会的スキルの発達には、きょうだいの有無ではなく、きょうだいの規模が影響していることが考えられる。社会的スキル⑧、⑨、⑫を表5でみると、モデルa・bでは有意差がみられるが、モデルcでは有意差が消えているものがある。このことから、問題行動の統制能力については、きょうだいの有無が関連することと、きょうだいの規模も部分的に関連が見られることが考えられるだろう。

以上より、社会的スキルには、きょうだいの有無が影響する社会的スキルと、きょうだいの規模が影響を及ぼす社会的スキルがあるということが指摘できる。

5. きょうだいの有無と社会的スキルの発達について

表5で、きょうだい人数と社会的スキル12項目をクロス分析した結果、有意な差がみられた項目は、社会的スキル①、④、⑤、⑥、⑧、⑨、⑫の7つであった。それぞれの回答において、「よくあてはまる」と「少しあてはまる」を合わせて、その評価が高かった順にきょうだい数を並べた結果が表6、表7である。

表6 社会的スキル別評価

(%)

	社会的スキル①		社会的スキル④		社会的スキル⑤		社会的スキル⑥	
1	ひとりっ子	65.5	3人	73.0	4～6人	66.6	ひとりっ子	49.3
2	2～6人	61.7	ひとりっ子	67.6	3人	65.5	2～6人	44.3
3			2人	64.7	2人	58.0		
4			4～6人	57.1	ひとりっ子	54.9		

表7 社会的スキル別評価

(%)

	社会的スキル⑧		社会的スキル⑨		社会的スキル⑫	
1	ひとりっ子	62.7	ひとりっ子	68.8	3～6人	74.6
2	2人	52.7	2人	56.7	2人	69.6
3	3人	47.5	3～6人	53.0	ひとりっ子	68.3
4	4～6人	38.2				

(1) ひとりっ子の特性について

一般に、きょうだいが多いほど社会的スキルの発達は促されると考えられているが、表2でも見たように、あるいは表6、表7の結果からも、必ずしもそうとは言えないようである。たとえば、対人関係能力の「①初めて会った同年代の子どもに自分から話しかけることができる」という社会的スキルについて、ひとりっ子が最も優位であった。従来、家庭内にきょうだいがいないことによる相互交渉の少なさから、比較的ひっこみ思案で人見知りであり、そのために、友達関係作りに困難が生じていると考えられていた。しかし、大人の世界で育ち、大人の社交場に慣れたひとりっ子は、初対面という緊張した場面においても物怖じしない精神力が鍛えられたのではないかと考えられる。また、ひとりっ子が遊ぶ相手は母親であることが多いが、きょうだいのいる子どもは、ほかのきょうだいが遊び相手であることがほとんどであろう。そのため、ひとりっ子は、きょうだいのいる子どもよりも母親以外の遊び相手を作る必要性が高く、必然的に、初対面の人に話しかけるといった対人関係能力が早期に発達することが考えられる。

また、「⑥自分が遊んでいるおもちゃをお友達にとられてもあまり怒らない」（自己統制能力）についても、ひとりっ子の方がきょうだいのいる子どもよりも評価が高い。これは、ひとりっ子は大人ばかりの世界の中で育てているために、きょうだいのいる子どもに比べると早熟であること、あるいは、物や親を独占できる生育環境にあるので強烈的な競争心や嫉妬心を抱くような環境になく、大らかな気性となる傾向が指摘できるかも知れない。

しかし、自己統制能力の「⑤友達と一緒に遊ぶときに、お友達に何をしたいのかを尋ねることができる」と問題行動の抑制能力の「⑫わがままを言わずにみんなと一緒に遊ぶことができる」は、ひとりっ子の数値が一番低い。

自己統制能力⑤の「友達と一緒に遊ぶときに、お友達に何をしたいのかを尋ねることができる」は、友達の権利を尊重した行動をとるという社会的スキルを想定したものである。ひとりっ子の評価が一番低く、きょうだい規模が大きければ大きいほど評価が高いのは、自分以外の相手を思いやる心は、まず家庭内のきょうだいとの関わりあいの中で生まれていくものであることが考えられる。きょうだいのいる子どもは、人間関係の基礎を幼いうちから学び、妥協する

ことの訓練を受けている。きょうだい人数が多ければ多いほど、関わりあいのパターンの数が増え、他のきょうだいの気持ちを察して自分の欲求を抑え、相手を尊重しなければならない場面に立たされることも増える。そうした経験を通して、思いやりの心も育まれていくのであろう。きょうだいのいる子どもは、家庭内でもこのような社会性を身につける機会に恵まれるのである。

また、問題行動の抑制能力の「⑫わがまを言わずにみんなと一緒に遊ぶことができる」は、「全体の活動を妨げない」という社会的スキルを想定したものである。きょうだいのいる子どもはきょうだいと共に行動することが多く、その際、お互いの活動を把握し、適切に行動していくことが必要である。自分ひとりがわがまを言う、きょうだい同士の活動自体が進まなくなる。そのため、きょうだいのいる子どもは自分の意見を主張するだけでなく妥協する術を身につけていくことになる。ひとりっ子はどうか。ひとりっ子はしばしば、利己的でわがままであるといわれている。子どもは皆、自己中心的であるといわれているが、ひとりっ子は特にその傾向が強く（詫摩、1981）、自分の活動に夢中になりがちで、ほかの友達への活動へ注意を向けることができないため、結果的に全体の活動を妨げてしまいがちなのだという指摘もある。

きょうだいの存在が社会的スキルの発達に対して及ぼす影響を考えるために、ここでは、ひとりっ子の特性に着目して見てきたが、きょうだいがいない子どもを取り囲む環境特性としては、第1に「周りに自分と対等の立場であるきょうだいがいないこと」、第2に「大人の世界の中で育つこと」があげられ、この2つの環境要因がひとりっ子のもつ長所にもなり、また短所ともなり得ることが調査結果からも指摘できた。

(2) きょうだい数と子どもの発達について

ところで、表6の対人関係能力の「④困っているお友達に自分から声をかけることがある」の評価に注目していただきたい。もっとも評価が高いのは、「3人きょうだい」で、次に「ひとりっ子」、「2人きょうだい」、「4～6人きょうだい」という順になっている。また、「自己統制能力」は、きょうだいの有無ではなくきょうだい規模の影響が強く（表3、4）、合計得点が高い順にきょうだい人数を並べると、「3人きょうだい」、「ひとりっ子」、「2人きょうだい」、「4～6人きょうだい」という結果であった。特に、「4～6人きょうだい」が低い評価を得ているという結果は、DowneyとCondrónの研究結果にもみられるものである。DowneyとCondrónの研究において、「自己統制能力」と「問題行動の表出」については、きょうだいが何人であろうとも、ひとりっ子に比べれば高い評価を得ていた。しかし、「対人関係能力」においては、2人きょうだい、3人きょうだいは、ひとりっ子に比べると良い評価を得ていたが、4人きょうだい以上になると、その評価はひとりっ子のそれと大して変わらないという結果だったのである。

子どもが家庭内できょうだいとの相互作用をもつことは、子どもが友達関係を築いていく過程で重要な役割を果たしている。きょうだい人数が増えれば増えるほど、相互交渉のパターンの数も増えるが、しかし子ども同士の年齢差が大きくなる。6人きょうだいになると、上の子どもと下の子どもの年齢差は少なくとも6年以上は開くので、年齢差が1才や2才のきょうだいとの関わりあいとは質も量も異なることが考えられる。年齢差が大きくなるほど、「ナナメの関係」であるきょうだいであっても、「タテ」の要素が加わり、「ヨコ」の要素が弱くなる。きょうだいと「ヨコの人間関係」をもつことは、家庭外で友達関係を築いていく上での基礎と

なるので、したがって、きょうだい関係における「ヨコ」の要素が弱くなるということは、きょうだい関係の重要な役割である「社会性を身につける」作用に何らかの別の要因が働くと考えられる。

以上の結果より、子どもの社会的スキルの発達に関しては、単純に「きょうだい規模が大きければ大きいほど、子どもの社会的な発達に良い影響がある」（仮説2）とはいえないこと、きょうだい規模やきょうだいの有無だけでは考察することができないことが指摘できる。

6. 結論と課題

本研究では、「きょうだいは子どもの社会的な発達を促進させる」という仮説を証明する社会的スキルと、仮説に反してひとりっ子の優位性を示すような社会的スキル、また、きょうだいの適切な人数やふたりっ子に対する危惧を示唆するような社会的スキルが存在した。したがって、社会的スキルの内容に着目しなければならないこと、一概に「きょうだいは子どもの社会的な発達を促進させる」とはいえないことが明らかになった。

少子化時代になり、家庭内における子どもの数の減少は、相互交渉のパターンの単純化、家族関係のパターンの単純化をもたらすため、今後ますます議論されていくべき問題である。本研究では、ひとりっ子の方が優位な社会的スキルがあることも明らかになったが、しかし、きょうだいがいないことは同胞との相互交渉の少なさを意味する。親子といった縦の関係でなく、きょうだいという家族内での横の関係を補うような対人関係の意義についても今後の課題となるであろう。

きょうだいと子どもの社会的スキルの発達研究の今後の課題としては、まず第1に、年齢段階に応じた社会的スキルの設定・妥当性に関する研究の発展が望まれる。本研究ではDowneyとCondrónの研究を参考にして社会的スキルを設定した。しかし、社会的スキルという概念そのものがまだ確立していないということに伴い、社会的スキルを表す項目を設定すること自体に困難が生じる。さらに、「幼稚園児」の社会的スキルを測るためには幼稚園児が社会的スキルを表出する場面を特定しなければならず、ますます社会的スキルを設定することは困難となる。よって、特に、社会的スキルという概念の定義および指標化の確立が課題である。

第2に、日本におけるきょうだい研究の蓄積が望まれる。本調査では、大規模なデータを用いてきょうだいと社会的スキルの発達に関する先行研究を探ることができなかったためアメリカの先行研究を参考にして質問項目の設定を行った。しかし、日米の文化差を考慮した——日本の文化・社会背景、育児観の差異などを考慮した質問項目の開発が今後は望まれるであろう。DowneyとCondrónの研究結果において、彼らは一貫して「少なくとも1人のきょうだいと共に育っているとき仲間関係がより上手いき、きょうだいのいる子どもは平均的にきょうだいのいない子どもに比べてより良い社会的スキルと対人関係におけるスキルを示す」と結論付けている。具体的に彼らの研究結果では、「対人関係能力」、「自己統制能力」、「問題行動の抑制能力」すべてにおいて、ひとりっ子よりもきょうだいのいる子どもの得た評価が良かった。しかしこの結果は、設定した社会的スキルの項目は同じであるのに、本研究の結果とは異なる。

きょうだい関係と子どもの発達に関する研究が数少ないなか、また少子化が進行するなかで、きょうだいと子どもの社会的発達においてどのような影響力をもつのかに関する研究はますます必要となるであろうと思われる。

注

- 1) ECLS-Kにおけるデータは、1998年から1999年にかけて幼稚園に通っている子ども21,260人を代表としたもので、妥当とされた20,649ケースにもとづいている。子どもの平均年齢は6歳2ヶ月である。両親の情報は電話による調査を実施し、教師には自記式質問紙調査を行っている。サンプルの55%が白人、15%が黒人、18%がヒスパニック系、6%がアジア系、5%がその他の人種である。ほぼ5人に1人がひとりっ子である。サンプルのきょうだい数については、きょうだい一人いる子どもが42%、2人が26%、3人が10%、そして4人かそれ以上のきょうだいが5%である。3分の2のサンプルにおいて血縁関係のある両親と同居している。独立変数は、きょうだい人数、きょうだいの年齢差、きょうだいの性別であり、従属変数は対人関係能力、自己統制能力、問題行動の表出、また読解力と数学的能力である。また、統制変数は、両親の社会経済的地位、人種、両親の年齢、家族構造、子どもの障害、子どもの年齢、放課後学級への参加の有無、子どもの健康状態、生まれたときの体重である。
- 2) きょうだいの資源分配説は、両親から子どもに与えられる資源 (parental resources) は有限であるという仮説にもとづいている。両親から与えられる資源は、(a)日常用品、文化的物資 (本、絵、音楽など)、(b)個人的な世話、注意、配慮、干渉、しつけ、(c)家庭外の世界との関わりを子どもにもたせる特別な機会、の3つに分けられる。資源分配説によれば、子どもの社会的なスキルの発達においても何も利得はないとされる。
- 3) きょうだいの資源供給説は、きょうだいとの繰り返される相互交渉に焦点を当てて、きょうだいの存在による利得を指摘している。これは、きょうだいの存在が、同胞関係にまで一般化されうるような対人関係能力を発達させるという面で、ひとりっ子よりもきょうだい一人いる子どもは有利であるという見方である。

参考・引用文献一覧

- ・相川充・津村俊充 編『社会的スキルと対人関係』誠信書房, 1996
- ・Douglas B. Downey and Dennis J. Condrón (2004) . “Playing Well with Others in Kindergarten : The Benefit of Siblings at Home. ” *Journal of marriage and Family*, 66, 334-350
- ・正岡寛司・望月嵩 編『現代家族論 社会学からのアプローチ』有斐閣, 1988
- ・新村出編『広辞苑』岩波書店, 1955
- ・白佐俊憲『きょうだい関係とその関連領域の文献集成』川島書店, 2004
- ・清水弘司「きょうだい関係」瀧本孝雄・鈴木乙史 編『家族の人間関係』ブレーン出版, pp.91-112, 1986
- ・住田正樹・高島秀樹 編『子どもの発達と現代社会』北樹出版, 2002
- ・詫摩武俊『ふたりっこの時代』朝日出版社, 1981
- ・依田明・清水弘司編『きょうだい』現代のエスプリ159号, 至文堂, 1980